

「社会政策論」 最終授業

田 沼 肇

そいじゃあ講義を始めます。今日は、学生諸君にとっては、試験前の忙しい時でありましょうし、教員である私たちにとっても忙しいんですが、それだけでなく私の場合は、この講義を最後にして、法政大学を退職しようと考えています。で、最大の理由は、パーキンソン病という病気に私がかかってしまっただけで、もう何べんも話したから内容は繰り返しません、難病であることは間違いなくて、特に体力の低下が目立つというわけなんです。

私は法政大学の教壇に立つようになってから、三十数年たちます。私たちの共通の職場である法政大学を、私も最後まで、愛するってのもおかしいけど、愛してきましたし、これから、そうしたいと思っておりますが、病気は、根治療法がないので、対症療法でしか薬を使うことができないんです。

前回まで十二回、こういう形式でレジメを作った、勉強してきましたが、今日も、その継続として、できればなるべく普段と同じ授業を続けたい、というふうには考えています。お手もとにいま配ったレジメは、「社会政策とはなにか」の五回目です。だいたい二人に一枚ぐらいはあると思いますが・・・。今日は、私という一人の人間が、どのようにして社会政策の課題に取り組んできたか、ということを考えてみたい。試験が近いので、今日初めて私の講義を直接に聞く人、または二、三回目の人もいると思いますが、そういう人のためにも役立つようにレジメを準備したつ

もりです。皆さんがこのメモを読んで、自分はこういうことを考えた、ということがあれば論じて下さい。もし自分にその能力、あるいは条件ありと考えると、社会政策に取り組む自分の姿勢、生き方、考え方などを、学年試験に書いて下さってもいい。だがそれは、あくまで社会政策という学問に則して考えてほしい。その点ご注意下さい。

今年も、社会政策とは何かについて、その概念、歴史、現代社会政策の特徴を、労働政策、賃金問題、雇用失業対策などに重点を置いて話したつもりです。ただし、社会政策を全社会的な視野で捉えることが、これからの社会を生きてゆくには、是非必要だと考え、講義も、そのように話す努力をしました。ここで特に注意してほしいのは、「社会政策を全社会的な視野で捉えること」ですが、これが私の講義では、必ずしも十分に達成されていませんでした。以下では、メモを一区切りずつ読んで、私の注釈を加えるという仕方の講義を許して下さい。

戦争と私

私は旧制高校二年の時に、今で言えば高校三年生の時に、勤労働員で工場で働き、初めて生産の現場を知りました。今の学生諸君は、アルバイトの経験をもっている人がほとんどでしょうし、いわゆる生産現場を担当したところのある人も少なくないと思いますが、当時の高等学校の生徒は、社会の特権階級に属していました。その私にとっては、軍需工場に強制的に動員されたということは別にしても、巨大な工場の現場で働いたことは強烈な体験でした。

戦争による被害という点では、私も東京の二度目の大空襲（五月二五日）で家を焼かれ、あの時もし逃げる方角がまずかったら焼け死んだらうという経験をしましたが、この大学の総長でもある阿利莫二さんは、戦後に大学で私の同窓生になった人ですが、当時のご自分の体験を、今から五年ほど前に、『ルソン島―死の谷』という岩波新書にして公刊しておられます。阿利さんは私より三つ年上であったため、昭和十八年秋の最初の学徒出陣で入営して、約一

年後にフィリッピンのルソン島に渡ったのでした。この本を読めば分かると思いますが、当時のルソン島の日本軍は山岳地帯を敗走中で、敵機の爆撃や機銃掃射の下で飢えとマラリヤなどと戦わねばならず、日本軍側の内部でも、相互扶助ばかりでなく、いろいろな生存競争なしには生き残れなかったものでした。私のいた日本の本土の人々の置かれた状況も、ある意味では、それと同質でした。もちろん、多くの人は、ルソン島や沖繩などにいた日本の軍人軍属や民間人の場合ほど過酷な状況は免れましたが……。今日、学生諸君がこの本を読むと、恐らく諸君は、強い印象を受けて一気に読み通すが、読後に必ずしも深い印象は残らないかもしれません。もしそうなら、それは、この本に描かれていることは、ドラマチックな物語りではなく、ある意味で日常的なことであり、その日常性が今日の世界全体に、いや日本の中にも、今も続いているからではないでしょうか。ともあれ、戦争はいかに無残なものであるかを知るため、考えるための一つの手掛かりとして、諸君の身近の阿利さんのこの本は、なかなか示唆に富むと思います。

「私の大学」の始まり

戦争が終わった年の三月に私は高校を卒業して、大学に入学し、文科系の学生は徴兵延期がないので、八月に入営することになっていたのでありますが、その直前に終戦になりました。終戦と同時に、私は勤労働員でジュラルミンの圧延伸長工として働いていた工場を訪れました。そしてそこで、戦時中労働者の間に戦争に反対する動きがあったことを初めて知りました。反戦ビラなどの地下運動です。今でも私は、あのととき、大学のある本郷から、工場のあった板橋の志村まで、跳ぶように歩いて行ったことを、ありありと覚えています。

その頃、軍隊から復員してきた友人たちと共に、何をすべきかを検討しました。その時に出た代表的な意見によって、学生が中心になって壕舎生活者の調査をすることになりました。これが私にとっての本当の大学の始まりでした。

「社会政策論」最終授業

壕舎生活者とは、空襲のとき避難するために作った防空壕に、戦後も住んでいた人たちのことです。焼け跡の、自分の家の防空壕に限らず、誰もいない焼け跡の使いそうな防空壕を見付けて掘って建て小屋のようなものを作って住み着いていた人たちがいろいろいました。そういう人たちに向けた質問項目を作って、私たち学生が二人一組になって面接調査をして回ったわけです。学生たちを指導されたのが、後に東大の総長になられた大河内一男先生でした。その調査結果をまとめて、「起ちあがる人々」という題をつけてパンフレットにしました。これが、私のとっては、実態調査を経験した最初の機会でした。事実を明らかにして、議論を組み立ててゆくという学問の方法を学んだ私は、戦争とか平和とかの問題も、その立場で考えるようになりました。

科学者として生きる

一九五四年の春、第五福龍丸のビキニ被災事件が起きました。それによって私も、原水爆禁止の課題へ大きく目を開かれました。文字どおり世論が広がり、高まって、歴史的な事件として、我々の前に展開してきました。その中で、学問とか科学とかの立場から、学者・科学者としての責任を果たさなければならぬ問題があることが、科学者たちの間で、それまでより深刻に反省されるようになりました。ただし、ここで科学者というのは、やや広い意味で、社会科学も含むことはもちろん、科学の研究・実践または応用・教育などの仕事をする者という意味です。だから科学労働者と言ったほうがよかったかもしれないかもしれません。その中で私たちは、科学者としての責任を果たしたいと思うようになります。私たちは、広島・長崎の被爆者の実態調査、社会科学的な原因の究明、そしてまた被爆者の実態を広く内外にアップピールする仕事に取り組みました。原子力潜水艦の寄港が頻繁になった時、科学者たちだけのデモをやったこともありました。

社会政策の勉強は何の役に立つか

社会政策の研究に当たって、一番注目すべきことは、その時代の時代背景に最も強く結び付いている学問の一つだということです。社会政策を学ぶことは、「飴と鞭」というような、古くからある権力者のごまかしを見抜く力を身に着けるのにも役立ちます。この意味の役立ちは、いわゆる実用とは違うことを肝に銘じていただきたいと思います。

私は長らく、労働者の問題、特に賃金問題や雇用失業問題と、労働組合の問題、それに関連した平和運動の問題をテーマにして、多少の研究と実践を続けてきました。社会政策というものは、歴史的には、労働政策として発展してきましたが、近年のその研究の発展と社会そのものの発展は、旧来の社会政策の枠を越えて、社会保障や社会福祉、特に人権の擁護という、労働者階級だけでなく、国民一般の要求をも積極的に扱わねばならぬことを示しています。社会政策の研究の発展は、国民諸階層の多くにとって共通した要望になってきたに違いありません。

これから私は何を勉強しようとしているのか

私は、これで大学の職を去ります。残念ながら、健康の回復を保障する術はありません。テレビを注意して見ても、自立を願う障害者たちが、どんなにたくさんの人々に支えられて生きているかが、いろいろ分かります。最近この分野の研究が進んできました。そして、障害者に接したり障害者を助けることは、時には、障害者から学ぶことになり、かえって自分が障害者から助けられることにもなるということが、いろいろ気付かれてもきたようです。今後の社会では、ますます多くの人々が、自分の身近な家族などの中に障害者を抱えたり、自分自身がいつか障害者になることを考えなくてはならないでしょうが、社会保障の充実と障害者の人権の擁護は、単にそのためだけに必要な

「社会政策論」最終授業

のではなくて、助ける側の人自身の人間としての生命の質の向上にとっても役立つのではないのでしょうか。こういうことは、障害者福祉問題に限らず、我が国で言ういわゆる社会福祉政策の枠を遙かに越えた国際的および国内的ないろいろな社会問題にも当てはまるように思います。先ほど阿利さんの本に関連して示唆したことは、そういう意味のことです。

こんなことを考えて、障害者である私も、自分の生き方に自信と誇りをもって生きてゆきたいと思っておりますが、とは言っても、今後はますます外からの助けに頼らざるを得ません。

今日は、たくさんのお客様が集まって下さって、ありがとうございます。こんど君たちに会うときには、私の病気がよくなっていることは期待しないが、君たちの生活のたくましい発展を期待します。

残念ながら、足腰が不自由なので、一緒に立って拍手することができませんが、今の拍手を、たいへん嬉しく戴きます。

(一九九二年十二月十四日の講義録音に加筆したものです)